

人間性向上がCSRに不可欠 —— 海外で注目される日本発の思想、修養法

環境マネジメントの審査員やCSR関連のコンサルティングなどの経験を通じて感じるのは、自覚、意識、「人づくり」の大切さだ。義務感でイヤイヤながら環境マネジメントやCSRに取り組んでいて、成果はあがらず、手間とコストばかりかかっている会社もある。CSRでさまざまなステークホルダーとの関係構築やリスクマネジメントで成果をあげ、持続的発展を確保するためには、人格、人間性(人間力)を高めることが有効と考えられる。これに関して、私自身も、いろいろな思想家などの勉強や修養体験を続けているが、以下の表に掲げるのは、そのなかで印象に残ったものである。

CSRと関連する、日本人が説く修養法や哲学(例)

テーマ	創始者等	説く内容の例/CSRと関連する特徴	主な関連書
禪的修養	白隠禅師 (1685-1768)	・内観の秘法、精神安静法、呼吸法 ・九州の細川侯に美食批判、空腹の価値を教える	直木公彦『白隠禅師—健康法と逸話』日本教文社、1975年
心身統一法	中村天風 (1876-1968)	・ヨガの指導者に受けた教えをベースとした「心身統一」による「積極的人生」の実現方法 ・真と善と美を説く	中村天風『運命を拓く 天風瞑想録』講談社、1994年
心身統一合気道	藤平光一 (1920-)	・合気道に中村天風氏の心身統一法をとり入れる ・自分だけが儲けて、人は損するような、天地の理に合わないことをやってはいけない	藤平光一『中村天風と植芝盛平 氣の確立』東洋経済新報社、1999年
マクロビオティック	桜沢如一 (1893-1966) 久司道夫 (1926-)	・穀物菜食中心の食生活普及を通じて人間性、精神性を向上させ、人類世界の平和実現をめざす	久司道夫『マクロビオティックが幸福をつくる』成甲書房、2005年
断食療法 (西式健康法)	甲田光雄 (1924-)	・牛や豚を平気で殺すというのは、私たちの心のなかに人類独尊という差別思想があるとする ・農薬や抗生物質、殺菌剤の乱用。その報いがはね返っていまや環境破壊という重大な問題になったとする	甲田光雄『断食療法50年で見えてきたもの 人類は愛と慈悲の少食へと進化する』春秋社、2003年

『成功の実現』などの著書があり、多くの日本の経営者が指導を受け影響されてきた中村天風氏は、世のため人のために行う経営について触れるなかで、以下のように書いている。

「同じ事業家でも、欲の固まりでやる者と、『この仕事で、世の中の人のために、本当に役立つものを提供しよう』という気持ちでやるのとでは、その結果が全然違うのである」(*1)。現在も、全国で、同氏の心身統一法を学ぶ活動が続けられているが、東京の護国寺で開催されている月例の研修会には➤

初めて来た人60人余を含む200人もの人が集まり、呼吸法や体操などを学んでいた。

中村天風氏は、海外ではほとんど知られていなかったが、心身統一合気道をはじめた藤平光一氏は、海外でも天風氏の教えを活用した心身統一合気道を広めた。藤平氏は自著で、天風氏の心身統一法の教授法を正しく改善したとしている。筆者は、一度体験講習を受けてみたが、時間の半分ほどを使って、天風氏の説くものと同様の誦句をとなえたり、ビデオでリラックスする方法を見たりと、普通の合気道の稽古とは異なり、「心」や「気」に時間が多くさかれていた。

現代は、美食・飽食の時代、新聞・雑誌やテレビで紹介されるごちそうと言え、ほとんどは、肉や魚であり、多くはエネルギーや飼料を大量に使ったものや希少なものだ。人間何か楽しいことがないと生きられない。食事はそのなかでも、最たるものであるが、一方で、健康・元気になるための断食や菜食主義が着実な広がりを見せている。筆者は、ここ1年ほど、少食・菜食中心の食生活に挑戦中である。意志が弱く、ときに食の誘惑を断ち切ることはできず不摂生に走ることもあるが、カロリー制限で体調は好転し、また、動物性食品を大幅に減らしたことなどで便通も快調になった。

精進料理につながるような穀物菜食中心の食生活普及を通じて人間性、精神性を向上させ、人類世界の実現をめざしているのがマクロビオティックだ。全粒(精米などをしない)穀物と菜食を中心とした日本的食材を加工して欧米人の口に合うような洋食を作る方法の普及が主体で、マドンナなど欧米の多くの著名人が実践しており、ダイエットや健康法の一種類のように見られがちだ。講習会に行くと大半が女性で、ますます人気は高まっているようだ。ただ本来、マクロビオティックは単なる食事法ではなく、幸福や平和の実現を志向している。とくに、米国でマクロビオティックを普及させた久司道夫氏の講演を最近聞く機会があったが、時間の半分が地球の危機にあてられ、戦争や環境問題への対応について論じられていた。

海外でも断食(ファースティング=fasting)が健康法などとして一部で普及しているが、日本でも広がりを見せている。断食・少食療法を実践してきた甲田光雄氏は、医学博士であるが、現代医学に限界を感じ、薬や手術に頼らない自然治療を五十数年間実践・研究し、断食・少食により人間本来の治癒力を高め、難治とされる種々の疾患に挑戦し、治療実績をあげてきたという。甲田光雄氏に師事した➤

人間性向上がCSRに不可欠 —— 海外で注目される日本発の思想、修養法

人としては、タレントのサンプラザ中野氏もいる(*2)。また甲田氏は、人間による環境破壊に強い危機感をもっており、少食によって「これまでやってきた人類独尊という差別思想に基づく行為を根本的に改め、動植物を含めたすべての”いのち”と共存共栄をはかるという、あの2500年前に説かれた釈尊の教え、つまり真の平等思想」が実行できるとしている(*3)。

以上のような思想、修養法、健康法等は、それぞれ一長一短あり、単独で完全なものとは言えない面もあろう。母体となる団体等もさまざまであり、慎重に取捨選択していく必要があるが、CSRを実践する企業のトップ以下の構成員が、身につける価値のあるものも多く含まれているといえる。こうした思想、修養法、健康法などは、世界的により高い評価を受けはじめている。最近、人口に膾炙しだした米国発のロハス(環境と健康によいライフスタイル)のルーツもアジアだが、それ以外にも、最近、企業経営において「精神性」が注目されはじめた。ジョン・ネイビッツの共著者として未来の世の中の潮流を予測する「メガトレンド」関連書籍を手がけており、『フォーブス』誌をはじめとする数々の雑誌等でも執筆活動に取り組むパトリシア・アバディーン(Patricia Aburdene)の『メガトレンド2010』(*4)は、新しい資本主義をつくる7つのトレンドとして意識の高い資本主義(CSR重視の経営)、ロハスの消費や、社会的責任投資(SRI)などとあわせて、「スピリチュアルこそが企業の業績をあげる」として、米国の多くの企業が、瞑想やヨガなどのスピリチュアル(精神)的手法を採用して効果をあげはじめたことを紹介している。それらの多くは、インド、中国そして日本などのアジアにルーツがあるものである。

中村天風氏は、宗教もナショナリズムにも批判的だったが「やがて少なくとも21世紀が来たら、日本が、思想的にも、アイデアの方面にも、また現実の事業の方面にも、必ずや、世界をリードするだけの、権威ができると私は確信する」としていた(*5)。同氏が予言したように、いま日本発の思想、修養法、食事法などが、海外で注目され、CSRにも貢献しようとしている。日本やアジアの伝統に誇りをもって人間性を高めていけば、おのずとCSRの仕組みづくりも向上し、世界に範を示すことができるはずである。

(脚注)

- *1: 中村天風『運命を拓く 天風瞑想録』講談社、1994年
- *2: 甲田光雄、サンプラザ中野『食べ方問答一少食のすすめ 我が心の師に健康道の奥義を訊く!』マキノ出版、2004年
- *3: 甲田光雄『断食療法50年で見てきたもの－人類は愛と慈悲の少食へと進化する』春秋社、2003年
- *4: パトリシア・アバディーン著、経沢香保子訳『メガトレンド2010』ゴマブックス、2006年
- *5: 中村天風、同上書

森 哲郎

(もり てつろう)

CEAR登録主任環境審査員。東洋経済新報社勤務を経て、株式会社KPMG審査登録機構に入社。ISO 14001の審査のほか、環境/社会報告書などCSR関連の業務に従事。主な著書に『ISO社会的責任(SR)規格はこうなる!』(日科技連出版社)、『ECS2000このように倫理法令遵守マネジメント・システムを構築する!』(日科技連出版社=共著)、『CSR入門講座 第2巻 推進組織体制を構築する!』(日本規格協会)など。2006年4月に独立。

